

# GOAL Activity における 正しい英語・言える英語・伝わる英語

池野 修

## 1. 正しい英語・言える英語・伝わる英語

*COMET English Communication* では、各レッスンの終わりに GOAL Activity を配置している。生徒が自分の考えや思いを英語で表現し、伝え合うという本格的な言語活動として位置付けており、これは改訂版でも継承されている。この活動における言語使用を、「正しい英語」「言える(自分の言葉として使える)英語」「伝わる英語」という観点から考えてみよう。

「正しい英語」とは、標準英語として正確な英語のことである。ただし、正しいからと言って、それが学習者に適した英語であるわけではない。学習者には、その時点での自分の能力で「言える英語」というのがある。辞書や AI の助けを借りてもよいが、原則として、自分の受容語彙(見て意味がわかる単語)を大きく超えるようなものは「言える英語」とは言えない。近年しばしば見られる、AI 翻訳を使って出力された英語を、ろくに意味もわからずに自分の言葉として発しているのは、「言えない英語」を使っている例である。最後の「伝わる英語」というのは、相手がかかる英語、相手に合わせた英語という意味である。

## 2. GOAL Activity での言語使用

「正しい英語」に関して、改訂版 *COMET* を使って学んでいる高校生が GOAL Activity を行う際には、乱暴な言い方かもしれないが、基本的に正確さはあまり問題にしなくてもよいのではないだろうか。意味の伝達を著しく阻害してしまう場合には指導が必要であるが、文法的正確さへのこだわりが生徒を萎縮させ、言語使用への意欲を減退させることがないようにしたい。(対照的に、GOAL Activity に至るまでの本文理解、文法理解、言語材料の練習などにおいては、「正しい英語」は大変重要である。)

「言える英語」については、「生徒がそれを自分の言葉として使えそうかどうか」という観点から英語表現の提示を行い、生徒にもそのような視点をもつ

て英語表現を選択するように指導したい。以下の例で、改訂版 *COMET* を使う高校生にとっての「言える英語」はどのようなものかを考えてみよう。

(例 1) 断る

(例 2) 危険だ(dangerous が思いつかない場合)

(例 3) どんな種類の犬が好きなの?(ペアの相手に尋ねたい質問)

例 1 は、辞書を引くと *refuse* や *decline* などの表現が提示されるかもしれない。これらの動詞が使えるのであればそうしてもよいが、*say "No"* と簡単に表現することもでき、こちらのほうがより「言えそうな英語」となる。例 2 については、意図した意味とまったく同じではないが、多くの場合 *not safe* で事足りる。例 3 は、実際にある生徒が英語でどう言えばよいか尋ねた内容だが、その場にいた ALT は *What breeds of dogs do you like?* という表現を提示していた。より生徒のレベルに合う「言える英語」としては、*I like poodles and chiwawa (chihuahuas). How about you?* などになるのではないか。「言える英語」でキーとなるのは基本単語や既習表現であり、そのフル活用を促したい。また、言語知識の不足を補うための伝達方略(近似表現、例示、元になる日本語の言い換え)が役立つ場面もあるであろう。

「伝わる英語」については、「この単語を使って、聞いている人は理解できるだろうか」、「わかってもらうには、キーワードを強調したり、もう一度繰り返したりしたほうがよいか」など、単に言葉(英語)を発するだけでなく、相手に伝わっているかどうかを意識することが重要となる。このメタ認知を伴った言語使用は決して簡単ではないが、特に GOAL Activity においては大切にしたい考えである。

(愛媛大学 教授)

Revised *COMET English Communication I*

代表著者